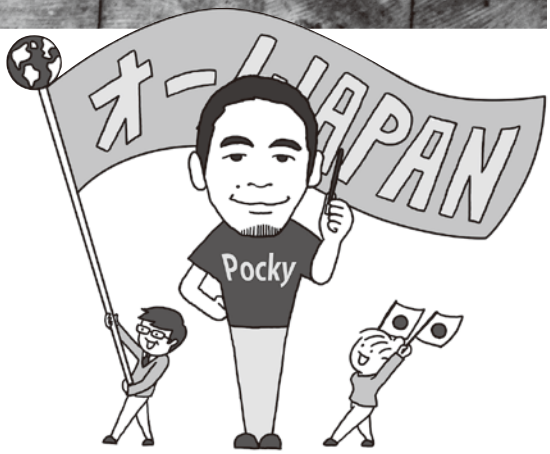
施工者に幸あれ 第60回

移行し続ける構造家

大野博史

朝倉幸子◉TH-1
illustration：Taco◉Switch・エンタテインメント



■オーノJAPAN

大野博史さんは，建築家からおおいに信望のあるアトリエ構造家。70年代生まれで活躍する若手のひとりです。社名の「オーノJAPAN」がどうしても気になる。命名の経緯を聞かずになるモノか。あら，「地名を入れたかっただけ」とは，シンプルなお答え。野心があってのネーミングではない，といわれても納得しかねるけれどね。「引っ越しが多く拠り所とする場所や地名がないと悩んでいたところへ友人から日本でいいんじゃないかと提案されて即決したんです」。

けれど，秘めた世界への想いも言葉に出る。「建物を外国でつくりたい，日本の建築家で」と。すでに，ニュージーランドで手塚建築研究所が設計した保育園の構造を担当して，完成している。その時に建設過程のシステムの違い，LVLが安価など，異国間での当然の違いを体験する。かつ，日本の建築のクオリティが施工に負うところが多いとも実感した。日本人特有の真面目さは，管理者も職人も同様でそれが施工の質の要でもある。中国やアジアではそうはいかないのはご承知の通り。そこで，施工側の勝手な変更や工事に，構造の立場でどのように対処するか。それを解決しながら，広い意味での建築をまるごと楽しみたいのが，構造のエトランゼ・オーノ。

■意匠から構造へ

日本大学では意匠を専攻した。その間ヨーロッパを廻り，大学院進学の前にはユーゴスラビアで一年間の研修を積んだというから，かなりのデザイン志向だった。「それなのになぜ構造に?」と覇志堂が投げかけると，大野さんは，デザインが自分に向いているのか漠然と不安だったと話す。そんな大学院を卒業する頃，斎藤公男教授（当時）が主催した講演会に参加する。初めて構造家の話を聞いて，ゼロからではなく，ある段階から建築を造っていく構造設計を知る。講演に来ていた池田昌弘さんに思いを伝えると，そのまま池田昌弘建築研究所に入ることになる。戦争帰りの兵士は苦労の多くを語らないが如く，所員時代を振り返ってにが笑い。その4年半の大野さんの奮闘独習を，施工者として垣間みていた筆者です。最後の頃は所長公認で個人の仕事をしていたそうで，「池田さんはプラスのところを見てくれる人だった」とか。

独立後，第6回日本構造デザイン賞を「ふじようちえん増築」（設計/手塚建築研究所）で受賞の快挙。

■ポッキーが構造

転勤族のお父上，転校が日常的だった子供時代を過ごす。だからなのか，物怖じしない性格で，新しい教室に入った瞬間にガキ大将がすぐ分かる。「鼻が効くっていうか…」と，屈託ない。反面，心の奥を安易に漏らさない面も。客観性を失わない大人の大野さんです。これらの要素が，構造家として独立し，建築家と一緒によい建築をつくり続けている基盤になっているのかもしれません。

「ヴィヴィット・テクノロジー」（共著，学芸出版，2007年）で語っている話が面白い。極細ポッキーが発売された時，衝撃的であったという話。見た目，手に取った感触，一口目の音，チョコの解け具合，そのすべてが違う。こんなちょっとした変化で凄く変わるのだと感動した。構造設計でも，そんな新ポッキー的発想で仕事がしたいという。当時極細ポッキーに同じ感覚をもったという，本コラムのイラストレーターTACO。「大野さんにあやかり世界で仕事を!」と決意したのでした。

「大きい身振りで構造をデザインしないことを目指している。建物が10年経った時の自然さを思いながらつくっていきたい」と，今日に留まらない構造家・大野博史さんは語ります。